

修復論 青野文昭

1. 修復跡から見えるもの

私はこの数年来「なおす」といういとなみの様々な意義に興味を持ってきた。

その発端は近所のコンクリート壁で見かけた壁の修復跡に目が止まった時からであった。ワレた穴やヒビに新しいコンクリートブロックやセメントが無造作に埋め込まれているもので、何かとても人間臭いナマナマしさを感じたのだった。「ナマナマしい」というのは、もともとの部分に対する修復された部分の「新しさ」からくるものだろうし、「人間臭い」のは、新しい修復部分に、人間の真新しい「行為性」を感じ、無機質なばかりの壁に「ズレ」が生じたからだろう。この「ズレ」は物理的には形や表面にわずかな違いをつくるだけなのだが、心理的に見れば、新／旧—現在／過去の対比のもとに「時間性」を内在させ、無機質な全体に対する手ワザとしての「行為性」を表出している。そして均質な「固定化」した全体像が消え、「流動化」し揺らいでいく全体像に変質していく。このような私の印象ないし観察において、「なおすこと」そしてその「痕跡」には、人間の感覚や精神に働きかける何か重要なものがあるのではないかという思いにかられたのだった。その後も様々な角度から「なおす」という行為をとらえかえし考察を続けているが、その思いはますます確かなものになってきた。「つくる」といとなみが担う創造性とは異なった意味で「なおす」といとなみにも、積極的な意義、クリエイティブな側面があるのではないか。また「なおす」といとなみをとらえなおすことによって「つくる」といとなみ、「こわす」といとなみという人間の根源的な行いを相対化し、またどのような関係があるのか、あるべきかを考えていくことができるのではないかと思っている。今回の文章は各個のつつこんだ考察よりも、その全体的なスケッチを意図している。

2. 修復の普遍性

「なおす」といういとなみは人間およびその社会、それを超え「秩序」、全体像、あるまとまりを持ったあらゆるもの、ことに見られる現象である。先に触れたコンクリート壁に限らず、人間のつくったもの、ことは破損すればただちに修復される。それは建造物、街並全体、室内空間の配置といった物質的ハード面のみならず、社会秩序、人間関係、自らの世界観、価値体系というソフト面、さらに人体、生命体、細胞という次元まで考えられる。生きられる秩序、全体はつねに「外部」の秩序ならざる領域と接触し闘っていると考えられる。「外部」の秩序ならざる領域とは、戦争における敵国だったり、共同体に対する異人、よそもの、犯罪者だったり、自らの世界観を危うくする別種の価値観だったり、人体に対する病原菌だったりする。これらの攻撃、侵入、侵食により、破損、破壊、および何らかの影響に対し、秩序側は「なおす」といとなみによって、修復、修正、復元、再編成、再組織化を行う。このような「外部」との接触とその「影響」にもとづく「なおす」といとなみは、つねに秩序につきまとうことである。以下、様々な次元の生きられる秩序に関する考察を記した文章によって、「秩序」が生き生きと存続するためには、つねに「外部」の影響のもとに「ゆらいで」いなければならないこと、そして「なおす」といとなみとは、広義に考えれば、内と外、秩序と秩序ならざる領域の影響、交流に深い関係があることが示されるだろう。

3. 修復の言語論的位相

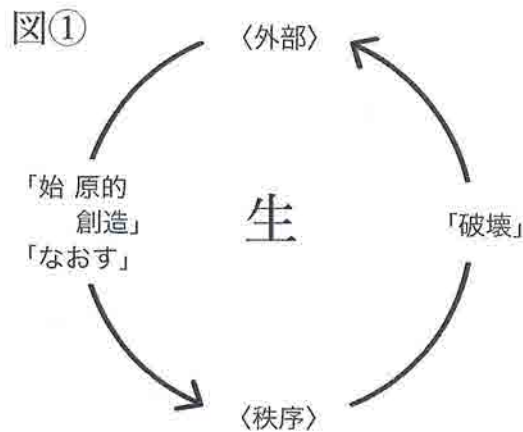
「こわれたもの」というコトバを用いる時、何がこわれたのだろうかということを考えてみたい。物質的な実体からしてみれば、「こわれる」というよりも一つの「変化」である。例えばコップがこわれたとすれば、こわれたのはあくまでも「コップ」というコトバに該当する特徴をそなえた、あるまとまりについてである。「コップ」を組織しているところのガラスの成分にしてみれば、全体としてのまとまりが「変形」または「分化」されたにすぎない。つまり「こわれる」とは我々が心の中に持っているところの「コップ」というイメージ—コトバの意味するものが「こわれた」わけである。「こわれる」ことによってコトバと実体が分離してしまうのであると思う。しばしば人々が「こわれた」ものに対して受ける強いショックはコトバから分離した実体（名前すらつけることができない）に直面することになるからだろう。既成の呼び名というベールを失ったその実態は、「日常的なコード」（価値の体系）とは別の次元を開示することになる。その次元はコトバの通用しないコトバを超えた領域なのである。「世界」あるいは事象はつねにこのように変化し流動している。事象は腐り、崩れ、こわれ、成長し様々に変質し続ける。このような「中間的」とも言える事象の本質は、つねにコトバからなる日常的なコード（価値の体系）を根底から揺さぶり、コトバの恣意（ルビ:しい）性、見せかけの日常性を露呈し続ける。「なおす」

いとなみとは、ガラスの破片をつなぎ合わせ「コップ」という概念にもとづいて再生させるという次元にとどまらず、つねに揺るがされているコード、つまり世界そのものをなおすことにほかならない。つねに世界観—価値体系は「外部」の力、新しい、別種の価値、ものの見方、あらわれ、情報に揺らぎながら、修復修正、再編成をくりかえし、変質し続けながら生きている。そして「なおす」いとなみとその経験は、より柔軟で幅広い、適応力、応用力を脳へ与えると考えられる。それに比べ、非言語領域と断絶し、閉鎖した態度は、日常的なコード（価値の体系）を硬直させ、オートマティックな儀礼的、形式的反応しか示せなくなり、適応力、応用力を乏しくする。場合によっては自らの世界観に非言語的領域が侵入するのこらえきれなくなった時、一挙に大混乱し、解体、衰弱してしまう。さらに「なおす」いとなみによって、組織の解体をまぬがれるだけでなく、非言語的領域—「外部」と直接触れ合うことによって、恣意的存在である自らの限られた組織を自己確認し、より強固に（外部との記号論的対立によって）再定義、再成立させることへ結びつく。このように、変化流転する事象の本質と人間のコトバのシステムとの交わりの中に、「なおす」いとなみがあるのであり、同時にこの交わりの中での「なおす」いとなみそのものからコトバのシステム—価値体系および現在の人間が形成されてきたのだと言える。

4. 民俗にあらわれる修復の記号論的考察

先に自らの内側の秩序に関して触れたが、今度は外側の秩序およびその修復について述べていきたい。

前近代的な「家」組織や共同体では、様々な災い（病気、死、日照り、凶作など）がおこると、様々な対応の一つとして「厄祓い」を行う。それは家単位の少人数で行われる場合もあれば、「御霊会」などとして国家的スケールで行われる場合もある。このような災いはいつなるとき襲ってくるか知れず、社会秩序は常にその対応に追われ揺らいでいる。これは言ってみれば混乱し破損、衰弱する組織の修復再生であり、先に述べた個人の価値観の修復、修正などと対応している。このような不測の事態における対応としての種々の儀式的他に、定期的に行われる村や国家の「祭り」についても考えてみたい。祭りの多くは、日常的な価値基準を一度ご破算にしてカオスの中から再び価値基準、秩序を再生させ、人々の心を刷新し活性化させる役割を持っていると考えられている。そこでは、村なり国家の始原的な創造神話なるものが、神との儀礼的な交わりのもと、象徴的に表現、演じられ、秩序の始原的創造が再体験、追体験される。つまりあらゆる組織秩序は、無秩序のカオスの状態からいかに今日の秩序、社会が生まれたかを示す創造神話のごときものを持っており、定期的な祭りにおいてそれが再現されることになる。同時に五穀豊穡、子孫繁栄といった願いと感謝が込められる。こうした願いは神との間で結ばれた社会秩序が正常なリズムを刻んでこそ成就すると考えられ、定期的な祭りの運営そのものがそれを保証、再認識するものと考えることができる。祭りも、始原的創造も、不測の事態の対応（厄祓い）も、みなカオス（外部）と秩序の交換関係として連関的に考えれば、「なおす」いとなみそのものと同質の性質を内在させていると言える。とすれば、祭りや不測の事態に対応する様々な厄祓いの儀礼は、「なおす」いとなみを社会化、意識化、自己予防化したものととらえることも可能であろう。さらに前近代的共同体のような閉じた体系の中では、始原的創造の再現（コピー）として定期的に祭りといった、「なおす」いとなみがあり、さらにその再現（コピー）として厄祓いや日々の「なおす」いとなみがあったと考えられる。そしてこの始原的創造は実際のなものというよりは、きわめて心的、理念的なものであり、修復—再生という実際の「なおす」いとなみによってのみ懷疑的に体験されるものであった。このように民俗において「なおす」いとなみはつねに個人、家、共同体、国といったあらゆる組織に密着し続けたもので、それは「外部」と「秩序」の記号論的対立および交わりの場と共に存立するいとなみであった。ゆえに「なおす」いとなみには、「外部」との交流と秩序の再定義という二つの大きな意義が内在しているととらえられよう。それは「新しい何かをつくる」ことを目的とし、ひたすら手つかずの「外部」を切り刻みつつ分節化したり排除したりするのではなく、未知なる領域をそのまま抱え込みながら、「外部」との交流をはたし循環する輪のシステムとして考えられよう。祭りなどに内在する「なおす」いとなみの意義に注目しつつ「循環するシステムの輪」（図1）として全体をとらえなおすとどんなことが言えるのだろうか。「秩序」は「外部」があってはじめて成立し、輪の一部にしかすぎない。また「創造」（より良い秩序構築）のみが中心に位置するのではなく、「破壊」によって相対化されやはり輪の一部となる。人の生はまさにこの循環する輪そのものであることが意識される。この循環する輪における生の全体性の表出こそ「なおす」いとなみに内在する最大の意義であろう。



5. 修復の心理学的考察

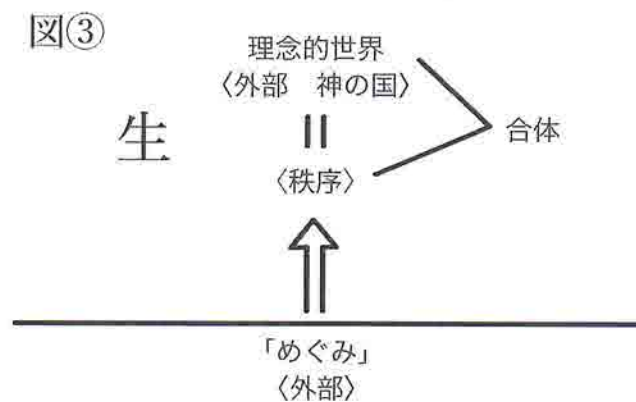
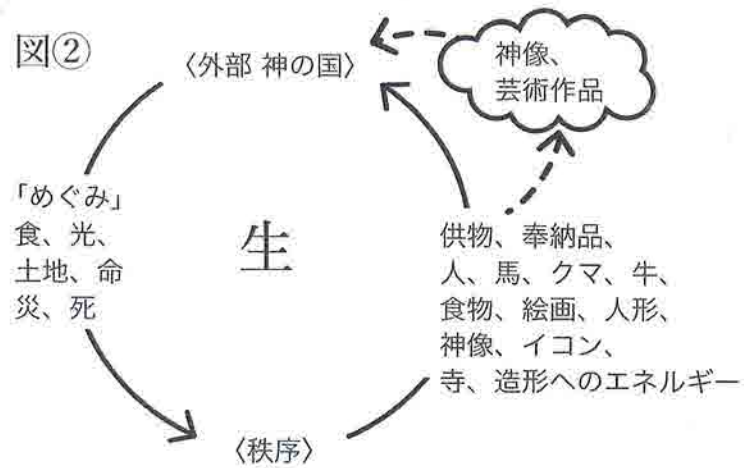
なぜ人は「なおそうとする」のか、というよりも、なぜ「それ」に不完全さを感じ不満を抱くのだろうか。

「なおす」となみはつねに、その当事者本人の記憶における破損、消滅以前の完全な像によって方向づけられる。この「完全な像」その物があやふやだったり失われてしまったりした時、人々の「完全な像」はより意識化の深層へ向かうことになると考えられる。記憶は遠ざかれば遠ざかるほど、抽象的であればあるほど理念性をおびてくるものである。その時、人は「なおす」ことを通じて無意識の奥深い世界と接触を持つことになる。この接触を先に述べた民俗の「祭り」におきかえて考えるなら、それは「外部」—「神」との交わりにほかならない。人々は祭りにおいてひとたび日常的価値を消滅せしめ、カオスの中から再び神と取り交わした神話に基づく秩序を再生させるのである。この神話的秩序こそ、当事者一人一人の深層に眠る元型的秩序なのであろう。人々は神話や神を体験すると同時に、自らの深層のイメージに出会うのである。ユング派の心理学においては、人間の無意識における元型的イメージと神話の内容の類似について様々な分析が行われてきている。特に始原的カオスとの闘いの中で秩序をもたらす英雄神話の物語などは、様々な困難の中から自己形成を実現する一人の心の成長を鮮やかに映し出すものであり、共同体秩序の再生がそのまま個人の自己の心的再生、再統合と重なり合うことになる。それでこそ祭り、神話というものが一人一人の中に生きられたのであろう。ユング派の捉え方では、さまざまな問題が生じて、心が退行期に入ると、意識から無意識に下向していき、不安定な状態になる。しかしやがて新たな再統合を果たして再生してくる時、それは深い世界を抱え込んだより全体的な心の成熟を示すという。それはより長い年月、「なおす」となみを繰り返している秩序（都市、家、部屋、庭園、世界観など）が、とても人間的な単純さと複雑さをあわせもつ柔軟な強さを持っているのに対応し、「なおす」となみに内在する「外部」と秩序、無意識と意識の交わりのゆえの同質の結果ではないかと考えられる。「なおす」となみは、このように無意識化のイメージを呼び起こし、そのイメージによって成り立つものであるから、当事者の心を無意識と触れ合いさせ、なおされる対象をより人間的に、より心的全体的に変質させていく可能性を持つと言える。

6. 循環するシステムについて

なおすことに内在し、なおすことで顕在化する「循環する輪」について先に触れた。今度はものの循環にポイントを置きながら、循環する輪に対する美術の位置を見てみたい。人間が実現する秩序というものは、外と内に境界を生み出し（精神的にも物理的にも）ながら「外部」の自然の様々なもの（食物、生命力、土地、木など）を奪い取り込んで成り立っている。「秩序」はまさに「外部」の自然からもたらされたものであり、きわどい関係の中に成立してきた。そこではつねに「外部」への「償い」「お返し」の回路が用意され、様々な自然の「めぐみ」の代わりに「供物」がささげられる。供犠によって取り交わされるこの一種の交換儀礼こそ「秩序」と「外部」の関係を取り持ち保証する。この供物と恵みの循環とその統御こそ「文化」そのものであり秩序の本質であると考えられ、それゆえ人間の文化の源はこの循環する交換の輪に由来し、相互に関連したシステムの一部になっていたと考えられる（図2、図3）。

外部—神が見えないものからしだいに見えるもの、実在的なものとして社会に取り込まれ世俗化していくと、それ自体の似姿として神像、仏像、イコン画、寺院などがつくられる。そしてそれに費やされるエネルギー、経済的負担そのものが奉納品として位置される。西洋においてはなほだしいのだが、外部、神の世界がより実在的な様相を示し、ついに秩序と一致する時、世俗権力と宗教権力が一致し、循環システムはほんの儀礼的なものになってしまうかこわされるかして、「外部」は排除、疎外される。様々な「めぐみ」としてあった自然資源、人材資源、エネルギーは、世俗的神聖権力への「供物」



として収奪される。もはや自然—「外部」は疎外され、公権力—秩序のための収奪領域に貶（ルビ：おとし）められる。一方向の供物の流れは王権などの一定のエリアのみ「めぐみ」を集中させていく。近代社会は、簡単に言えばこの一定のエリアへ集中する「めぐみ」を分配し、「神の国の秩序」からおきかわった「豊かで合理的な物質文明の秩序」を広げるだけ広げたにすぎない。より多くの人に「めぐみ」が分配され秩序は広がったが、あまりの集中的で激しい収奪に、自然や植民地が破綻しつつある。そこではいぜんとして循環する輪の流れが失われたままである。西洋美術作品のルーツは、循環する輪に由来する以上に、その輪の消滅を導いた「外部」（神の国）＝現実の秩序という等式あるいは合体に由来している。アートは、神の国つまり理想の世界の現実的な実現の一翼を担ったのである。自己批判によって様々な神話から脱却してきたモダニズム・アートは、アートそれ自体のあり方、意義を曖昧にし、存立そのものを危うくしてひさしい。それは、神話からの脱却に見えて、その基盤は神の国と現実の一致、合体を即したコンテキストから免れていないからであり、アートそのものの成り立ち、存在に対するより直截な自己批判に欠けるからである。それこそ、生の全体性としての循環の輪を無視することにほかならないのである。アートの蘇生は、アートを一度無に帰し、循環の輪としての生の全体性へ戻る場所から始められなければならない。循環の輪の一部にすぎなかったアートの性質、欲求は、この輪そのものにならない。この輪の全体性がアートに内在することこそ重要であろう。

「つくる」となみに比した「なおす」となみへの考察がその一つの手がかりになればと思っている。

これまで見てきたように、「なおすこと」は、カオス—再生のメタファーであり、神話、深層心理、様々な祭りなどの儀式、供犠、日常生活の掃除などに深く投影され体験されるものである。「なおす」という一見、消極的な無目的性は、かえって「外部」を排除せず、交わり取り込む循環の流れを顕在化させ、静的な秩序を循環の輪の中に位置づけさせて揺らぎと活力を生成させる。それこそ、「つくる」となみでは見えてこない、「なおす」となみに内在する固有の生の全体性を具現した「創造性」ではないだろうか。

本稿は、1991年の個展で「修復について」として発表され、1996年にうぶすな美術研究会機関誌「うぶすな」其之壱に掲載された「修復論」に加筆・修正したものである。

Theory on Repairing

Aono Fumiaki

1. What is revealed by the traces of repairing

For the past few years, I have been intrigued by the various meanings of the act of repairing.

This started when I found evidence of repairs on a concrete wall in my neighborhood. New concrete blocks and cement had been used to roughly fill in cracks and holes that had opened up. Somehow, I felt this to have a deeply human, raw quality to it. The sense of rawness likely came from the freshness of the repaired sections, which contrasted with the original sections. Meanwhile, the human quality probably came from the way I sensed brand-new human activity in the freshly repaired parts of the wall, and the shift this created in the wall, which was completely inorganic. In physical terms, this shift was just a matter of slight changes to the form and surface of the wall. Psychologically, however, it instilled a sense of time through the comparison of new/old and current/past states to express human activity as work done by hand, something that contrasts with the inorganic whole. The overall image of the wall as something uniform and settled disappeared and changed into one of a wall that had become fluid and unstable. Thinking about my impressions and observations, I was seized by the idea that there might be something important in the act of repairing and the traces that it leaves that engages human sensibilities and the human spirit. Since then, I have tried to reflect on repairing from a variety of angles and have started to feel increasingly convinced by this idea. In a different sense to the creativity that is in the act of making, the act of repairing may also have creative aspects and hold a positive meaning. Also, if we redefine the act of repairing, I feel it becomes possible to relativize fundamental human acts such as the act of making and the act of destroying, and to think about the kind of relationship they have or should have between them. The purpose of this text is to provide a general sketch of the overall picture, rather than to analyze everything detail.

2. The universality of repairing

The act of repairing is a phenomenon that can be found everywhere—in humans and their societies, as well as in the order that lies beyond them, the greater picture, and everything that has a certain coherence to it. It applies not only to the concrete wall I discussed above, but also to objects and concepts that humans create, all of which are repaired immediately after being damaged. These are not only the physical hardware of human life, such as buildings, the overall cityscape, or the layout of a room, but can also extend to things intangible, such as the social order, human relationships, one's worldview, and ideology, or even to dimensions such as the human body, lifeforms, and cells. An order or entirety that sustains life can be considered to always be in contact and in conflict with an "outside" that disrupts order. Such an outside entity can be an enemy nation in times of war, strangers in opposition to the community, outsiders, criminals, alternative ideologies that threaten one's worldview, or viruses that attack the human body. The attacks, incursions, and encroachments of such outside entities exert an influence and can cause damage and destruction. In response to this, order uses the act of repairing to renovate, revise, restore, restructure, and reorganize. These acts of repairing stemming from outside contact and its impact always accompany order. The following passages discuss the order that sustains life in various dimensions. They reveal that for an order to sustain itself vibrantly, it needs to be constantly undermined by outside influences. Furthermore, thinking about the act of repairing in a broad sense reveals a deep relationship between inside and outside, between order and the interaction and impact of entities that disrupts order.

3. The linguistic topology of repairing

I want to consider what has actually broken when we use the phrase “broken things.” From the perspective of the physical object itself, we are talking about a single change to the object rather than anything breaking. For example, if a glass breaks, what breaks is essentially a certain entirety of characteristics that are associated with the word “glass.” From the perspective of the glass (material) components that comprise the glass (object), its coherence as a whole underwent nothing more than a transformation or differentiation. In other words, when something “breaks,” it is the image in our minds of what we imagine to be a glass, and the definition of this, that breaks. Indeed, when something “breaks,” I feel that it is the word and the physical object that break apart. The big shock that people often experience when something breaks happens because they have to face the physical object (that cannot even be named) that has broken apart from the word. The actual state of affairs after the loss of the veil of an existing name, discloses a dimension that is different to everyday codes (ideology). This dimension lies somewhere beyond words; it is a realm where words are useless. The world—or phenomena, are constantly changing in such a way; they are fluid. A phenomenon is constantly transforming—it rots, disintegrates, breaks, grows. This essence of a phenomenon, which can be described as “keeping itself in the middle ground,” constantly undermines the foundation of the codes used in daily life (ideology) which are created through words, and constantly exposes the arbitrary nature of words and their superficial ordinarieness. The act of repairing does not only exist in the dimension where you piece together the bits of broken glass based on the concept of “a glass.” It is the repairing of constantly undermined codes, or in other words, the repairing the world itself. Worldviews/ideologies are constantly undermined by outside forces—new and different values, perspectives, manifestations, and information. Through this process, the worldview/ideology constantly changes to survive by repeating the acts of repairing, restoring, and restructuring. It is arguable that the act and experience of repairing would give the brain a more flexible and wide-ranging ability to adapt and apply things. Compared to this, a closed-minded attitude that estranges nonverbal areas rigidifies the codes used in daily life (ideology) and impairs our ability to adapt and apply, making us only able to react in automatic, ritualistic, and formalistic ways. In some cases, when one can no longer withstand the incursions of nonverbal areas into one’s worldview, one may end up in massive confusion, disintegrated and weakened. Moreover, the act of repairing not only prevents the disintegration of a system, but by directly coming into contact with the nonverbal area, the outside, it is possible to self-verify one’s limited, arbitrary system. One can then more solidly (through semiotic conflict with the outside) redefine and reestablish one’s own system. As such, the act of repairing exists within the relationship between the essence of an ever-changing phenomenon and the system of human words. At the same time, it is possible to claim that this very act of repairing in this relationship formed the system of words/ideology and the current state of humanity.

4. Semiotic analysis of repairing in folk customs

The previous section was a discussion of one’s inner order. Here, I would like to discuss external order and its repair.

Premodern household systems and communities dealt with a variety of calamities (disease, death, drought, poor harvests) using, among other things, rituals to ward off misfortune. These rituals could be conducted by individual households, which involved a small number of people, or they could be conducted on a national-scale as goryōe (ceremonies to appease evil gods and the spirits of the dead). Calamities could not be predicted, and the social order was constantly being undermined in dealing with them. In essence, this

was the repairing/revitalization of a system that had become confused, damaged, or weakened. It aligns with the repairing/revision of individual values discussed above. In addition to rituals for these kinds of unexpected events, I would also like to discuss festivals held regularly at the village or national level. There are many festivals that write off everyday value standards for a time, then resurrect these value standards and order from the chaos. They are considered to have a role in renewing and vitalizing the minds of the people. They are the occasion where the primordial creation myth of villages and the nation is played out symbolically by conducting ritualistic interactions with God and where the people re-experience and vicariously experience the primordial creation of order. In other words, every system/order has something like a creation myth that shows how today's order and society were born out of a disorderly state of chaos, and this is reproduced regularly in festivals. Festivals also incorporate prayers and gratitude for things like bumper harvests and the prosperity of future generations. These wishes are thought to come true when the social order established with God is in the correct rhythm. The regular holding of festivals is a way of guaranteeing and re-acknowledging this. Festivals, primordial creation, and dealing with unexpected events (rituals to ward off misfortune) can all be thought of similarly as relationships of exchange between chaos (outside) and order, which means they share the same innate character as acts of repairing. If this is the case, it is also possible to think of festivals and various rituals for warding off misfortune as the socialization, conscientization, and self-prevention of the act of repairing. Furthermore, in closed systems like premodern communities, there were probably acts of repairing such as regular festivals that acted as the reproduction (copy) of primordial creation, and, as the reproduction (copy) of this, rituals to ward off misfortune and daily acts of repairing. Rather than being realistic, this primordial creation was highly psychological and philosophical. Only through restoration/regeneration, the actual acts of repair, could it be experienced with skepticism. In folk customs, acts of repairing always sat very close to systems such as individuals, households, communities, and countries. They were acts that coexisted with the semiotic conflicts and interaction between order and the outside. Therefore, let us consider the act of repairing to have two major significances: interaction with the outside and the redefinition of order. Let us think of it as the system of the circulating circle that incorporates unknown areas just as they are and interacts with the outside instead of aiming to create something new and hacking up the untouched outside to separate and exclude. What conclusions can be drawn if we focus on the significance of acts of repair that are innate to festivals and if we redefine things overall as the circle of a circulating system (Figure 1)? Order only exists because there is an outside. It is no more than one part of the circle. Also, creation (the structuring of a better order) is not the only thing that is central. It is relativized by destruction and is just a part of the circle. This makes us aware that human life is precisely this circulating circle. The expression of life's entirety in this circulating circle is the great meaning that is innate to the act of repairing.

5. Psychological analysis of repairing

Why do people repair things? More importantly, why do people feel dissatisfied when something is imperfect?

The act of repairing always sets its course based on an image in the memory of the person concerned, an image of completeness prior to the occurrence of damage or loss. When this image of completeness is lost or uncertain, it proceeds to a deeper level of consciousness. The more distant and abstract a memory, the more it starts to take on a philosophical trait. When this happens, we make contact with the depth of the subconscious world through the act of repairing. If this contact is considered in place of the folk custom of festivals mentioned above, it is essentially the interaction with the outside, or God. Holding festivals, people eliminate daily values for a time and resurrect, from the chaos, order based on the myths exchanged

with God. This mythical order is the archetypical order that lies deep within each person concerned. At the same time as experiencing myths and gods, people encounter the image that lies deep within themselves. Jungian psychology has made various analyses of the archetypical images in the human subconscious and their resemblance to the content of myths. In particular, myths about heroes who achieve order through fighting primordial chaos are stories that vividly illustrate the growth of someone who succeeds in the process of self-actualization, despite many hardships. The resurrection of community order overlaps with an individual's self-psychological resurrection and reintegration. This is precisely how festivals and myths survived in each person. In Jungian terms, when various troubles occur and the mind goes into decline, the conscious mind submerges into the subconscious and becomes unstable. However, when it achieves reintegration and resurrects, it shows a more overall maturity that embraces a deeper sense of the world. This corresponds to the fact that order (cities, houses, rooms, gardens, and worldviews, and so on), which has repeated acts of repairing for many years, has a flexible strength with a human-like simplicity and complexity. This is the result of interaction between order and the outside, as well as the conscious and the subconscious, which are inherent within the act of repairing. The act of repairing thus stirs up subconscious images. Made up of these images, it brings the concerned person's mind into contact with the subconscious, and holds the potential for the thing to be repaired to transform in a more human, more complete psychological way.

6. Circulating system

I have touched on the circle of circulation that is inherent in, and becomes actualized through, repairing. Here, I will focus on the circulation of objects and where art stands vis-a-vis the circle of circulation. The order that humans actualize creates a boundary (both psychologically and physically) between inside and outside, and at the same time, it steals many things from nature outside (food, life force, land, trees, etc.) in order to exist. Order has been essentially gifted from nature, which lies outside, and has been formed in a very delicate and shaky relationship. Here, there have always been routes through which we can offer compensation or gifts of gratitude to the outside—offerings that are made in exchange for the many blessings of nature. The exchange ritual of sacrifice maintained and guaranteed the relationship between order and the outside. The circulation of offerings and blessings, as well as its regulation, is the very definition of “culture” and is the essence of order. Therefore, human culture stems from this circulation of exchange and was part of a reciprocally related system (Figure 2, Figure 3).

The outside, or God, gradually turned from something intangible into something tangible. As it was absorbed by society as something tangible and became popularized, representations such as statues of deities, Buddhas, ikons, and temples came to be created. The economic sacrifice and the energy spent doing this is considered an offering. Most notably in the West, when the outside world of God showed more of its real existence and finally came into accord with order, worldly power and religious power came into alignment. The circulating system became one of mere formalities, or broken, and the outside was rejected, shunned. Natural resources, human resources, and energy, which had existed as different kinds of blessings, were seized as offerings for the worldly religious powers. Nature, or the outside, was shunned; it came to be looked down upon as a place from which to extract things for the sale of public power, or order. The one-directional flow of offerings concentrated blessings only in certain areas, such as royalty. Put simply, modern society distributes these blessings that have come to be concentrated only in certain areas and simply expands, as much as possible, a wealthy and rational materialistic cultural order that has replaced the order of the land of God. While we now have a greater number of people receiving these distributed blessings, and the order has expanded, the overly concentrated and extreme extraction that happens is devastating nature and colonies. The flow of the circle of circulation that we once had continues to be

lost. The roots of Western artwork go further than being in the circle of circulation. They are in the equation: the current order = outside (the land of God), which annihilated the circle of circulation. Art played a part in realistically realizing the land of God, in other words, an ideal world. In its self-criticality, modernism/art freed itself of myths. It has made art and its significance vague and has long jeopardized its existence. This is because, despite this apparent break with myth, modernism/art has not escaped the context of its foundation being the conformity and coalescence of the land of God and reality, and because it lacks a more straightforward kind of self-criticism about the origins and existence of art itself. This is essentially to overlook the circle of circulation in terms of the wholeness of life. To revive art, we must scrap it and start anew, returning to the wholeness of life that is part of the circle of circulation. The nature and desires of art, which were just a part of the circle of circulation, must become the circle itself. It is actually important for the circle's entirety to be inherent in art.

My hope is that this analysis of the act of repairing as opposed to the act of making will be able to act as a clue.

As can be seen, the act of repairing is a metaphor for chaos/regeneration. It is deeply projected and experienced in myths, the deep psyche, rituals such as festivals, sacrifice, and the cleansing of everyday life. At first glance, the act of repairing seems to be passive and aimless. On the contrary, without eliminating the outside, it actualizes the flow of circulation that interacts and absorbs, then positions static order within the circle of circulation to generate fluctuation and vitality. It is the creativity that cannot be seen in the act of making, and that embodies the wholeness of life that is innate and unique to repairing.

- - -

This text is the revision/correction to On repairing, which was published in 1991 for a solo exhibition, and again in 1996 in Issue 1 of Ubusuna, the newsletter of the Ubusuna Art Research Society titled, Theory on Repairing.

